

2025 年度 個人投資家説明会 質疑応答要旨

開催日 : 2025 年 10 月 3 日(金)16:00~17:00

説明者及び質疑対応者 : 執行役員 経営管理本部長 半羽一裕

説明内容: 長瀬産業(NAGASE)について

成長戦略

株主還元

【質問 1】

アメリカの関税問題の影響について教えてほしい

見通しにおいては大きな影響は想定しておらず、現時点においても大きな影響は出ていない。アメリカでは Prinova の影響が大きいと思われるが、Prinova が取り扱っているビタミンは一部中国から調達している。ただ、ビタミンは追加関税対象外であるため、影響は小さいと考えている。また商社業に関しては、関税の値上がり分はお客様へ転嫁となるため、単価が上がることで逆にマージン分はプラス影響になるものもある。

ただ、物の値段が上がることでインフレが促進し、景気が後退することになれば、間接的にマイナス影響もあると思うが、現時点では想定していない。

【質問 2】

半導体に関連する銘柄ということで、長瀬産業に興味を持っている。半導体関連のビジネスにおける強みを教えてほしい

半導体製造工程の中で幅広くビジネスを展開しているため、業界全体を見渡して最新の動向を把握し情報提供することができる点が1つ。また、化学品専門商社として長年ケミカルを取り扱っており、そのノウハウが蓄積されており、こういった知見から、例えば Rapidus 社の材料輸送に関する取りまとめ業者に認定されたのも強みである。

さらに、液状封止という自社の高付加価値製品が最先端製品にほぼデファクトで使用されているというのはかなり大きな強みである。

【質問 3】

半導体市場は今後も拡大していくと思うが、液状封止材に競合は居るのか。

NAGASEがシェアを取っている製品が、競合の製品に切り替えられるリスクや半導体の事業環境も交えて教えてほしい。

競合はいるが、最先端向けのパッケージで競合に切り替えられる可能性は低いと考えている。

半導体業界は採用実績があることが重要である。半導体製品の、特にチップ単価が上がっている中で、封止は工程の最後になるため、不良が発生すると数百万円のチップが使い物にならなくなるというリスクがある。

NAGASE の封止材は 20 年以上、市場から評価されており、最先端のチップという意味では、製品の品質、技術の面と長年の実績がある点で当社品が使われる。以上から競合品に切り替えられる可能性は低い。

【質問 4】

フード分野における Prinova の強みを教えてほしい

まず、食品素材であるビタミンなどは、取扱品目、取扱量など Prinova は最大級と認識している。品目では、約 2,000品目の商品をストックしており、Prinova の供給力に依存している顧客も多く、過去にはコロナ後の物流の混乱時には、中小サプライヤーが素材確保できない中 Prinova の機能がフルに発揮されたことで、Prinova はシェアを拡大させた。

次にスポーツニュートリションの受託製造ですが、お客様が求める味・香り・形状・パッケージなど、それらを処方開発提案から素材調達、最終製品の製造まで一貫して担うことができるというのが強みである。

さらに、製造能力の拡大のための工場の新設や、かなりのボリュームの素材販売を行う背景には NAGASE の資金力、財務力もあり、コロナなどの調達危機の時であってもお客様の期待に応えられたことも強みである。

【質問 5】

株主還元方針を総還元性向 100%にした理由を詳しく教えてほしい

中期経営計画のKGIに ROE8%を掲げていることが理由のひとつ。ROE は、分母が資本、分子が利益になるため、資本が大きいと利益が増加しても ROE が向上しにくい構造となっている。

ROE8%を達成するには、利益の増加に加え、分母である資本の増加を少し抑える必要があると考えている。そのため、この 2 年間限定の措置として、100%還元することで資本の増加を抑える方向性を打ち出している。ROE8%の達成には資本戦略だけでなく、当然、成長のための投資も行いながら利益を上げていく両輪の施策を実施していく。

2026 年度以降の株主還元方針は、2026 年度に公表を予定している新中期経営計画と併せて公表する予定。

【質問 6】

今まで関わっていない新分野への進出、新規ビジネスの創出はどのように進めているか聞きたい

既存事業とは異なる視点での事業創出は、スタートアップ企業への投資活動を推進している。2023 年度よりコーポレートベンチャーキャピタルを活用している。2024 年度までに 10 件の投資を実行し

ている。ベンチャーへの投資はスピード感が大切であるため、2025 年度にはファンドを設立し、機動的で効率的な投資事業の加速を進めている。

【質問 7】

生成 AI に関連した銘柄として検討しているが、生成 AI 向けの半導体市場の急速な拡大は、いつ頃まで続くともっているか

汎用も含めた半導体全体は少し足踏みしているが、生成 AI 向けなどの最先端半導体は2桁成長が足元数年は続くとしており、市場調査会社の情報では 2030 年代半ばまで成長が継続すると予測されている。これは、ChatGPT に代表される生成 AI 用途だけではなく、AI PC や AI スマホ、自動運転やスマートシティ等から生成される膨大なデータに対応するために AI サーバー需要が押し上げられると予測されており、それに伴って先端半導体の使用量は増えていくと予想している。
需要を取りこぼすことの無いよう、設備投資を進め、供給体制を整えていく。

【質問 8】

一部で大きくシェアを取れている半導体の封止材に関連して、今後利益が伸びる局面や、業界の動向について教えてほしい

まず、利益面に関しては、生成AIや自動運転、通信、研究開発、製造業などのAI化が進むことで、最先端半導体の用途が増え、需要が大きく伸びることが予想されるため、利益の増加が見込める。
業界動向については、半導体パネルの大型が検討されており、均一に封止することが求められるため、現在の液状に代わるシート状の封止材を開発し、提案している。大面積でも被せて封止することができるため、液状よりシート状の方が封止のスピードや精度における優位性が高いと考えており、こちらも業界標準化を目指している。

【質問 9】

昨今の為替や物価は大きく変動しており、2025 年も継続すると見ている。NAGASEの業績に、為替や物価変動がどの程度影響するのか教えてほしい

NAGASE の事業は約半分が海外であり、グループ会社も約半数が海外にあり、25 の国と地域に展開している。これらの海外の業績を取り込む際に為替レートをかけて日本円に変換するが、その際に為替が影響する。

為替換算の影響額は、米ドルが 1 円円安になると、営業利益は 6～7 千万円増える。人民元は 1 円円安になると、営業利益は約 4 億円増える。これはそれぞれの通貨が単独で影響したものであり、実際は米ドルが変動すれば他の通貨もある程度連動して変動する。そのように為替全体で考えれば、米ドル1円の変動につき、約1億円強、営業利益に影響すると試算している。

物価上昇は、原材料の仕入価格や、ユーティリティコストに影響する。コスト上昇分はお客様への販売

価格に反映する方針である。

【質問 10】

今の株価をどのように考えているか。PBR1倍までの具体的な目標等あれば教えてほしい。

PBR1倍の達成は必ず実現すべきものと認識している。そのためには、中期経営計画で掲げている ROE8%の達成が第一歩と捉えている。分子である利益は、成長戦略を打ち出し、投資を進めて拡大させる。分母である資本は、総還元性向 100%により増加を抑える。

将来的には、ROE8%で留まるのではなく、成長戦略をベースに ROE2 桁の達成も意識している。

以上